

日本中世禅林における柳宗元受容

―後期の場合―

(人文・社会科学漢文学研究室) 太田 亨

はじめに

筆者は、これまで日本中世禅林の初期(鎌倉時代末期から南北朝時代末期)と中期(南北朝時代末期から応仁の乱頃)において、禅僧の詩文作品の中で柳宗元がどのように詠出されていたのかを考察した^①。

初期の禅僧は既に柳宗元の文章を高く評価し、その詩文に禅的要素を見出そうとし、種種の場面で柳宗元に関することを詠じていた^②。柳宗元の詩文の受容は講義活動とともに徐々に広く深まり、中期になると、新たに柳宗元の人となり詠出するようになったほか、「寒江独釣図」「愚溪図」といった柳詩をモデルにした画図に賛詩が付されるようになった^③。

では後期(応仁の乱頃から室町時代末期)における禅僧の詩文には、柳宗元に関することがどのように詠出されているのであろうか。本稿では、『五山文学全集』『五山文学新集』における後期禅僧の作品集を精査し、それらの中に柳宗元がいかに詠出されているか検討する。

一、柳宗元の文章に対して

初期において、既に柳宗元の文章に対する評価は高く、中期になると、それに対する講義活動が行われるようになった。後期ではどのように評価されているのであろうか。

彦龍周興(一四五八〜一四九二)は「呈桃源書」(『半陶文集』)で次のよう

に述べている。

話次翁告僕曰、夫詩也、少陵之精微、老坡之痛快、餘無可學者。況本朝諸老乎。文也者、得筆於退之、得意於子厚可也。宋元以後、不足把玩。秦漢以前、可以取則矣。然詩而雖壓杜蘇、文而雖折韓柳、只一詩僧耳。

話次に翁僕に告げて曰く、夫れ詩や、少陵の精微、老坡の痛快、餘に學ぶべき者無し。況んや本朝の諸老をや。文なる者は、筆を退之に得、意を子厚に得れば可なり。宋元以後は、把玩するに足らず。秦漢以前は、以て則を取るべし。然れども詩は杜蘇を壓すと雖も、文は韓柳を折くと雖も、只だ一詩僧のみ。

彦龍が桃源瑞仙(一四三〇〜一四八九)に呈した手紙の中で、話のついでに文筆の師・桃源が彦龍に対して詩文の評価、禅僧の詩文に対する接し方について語ったことを述べている。詩は杜甫の詩の精緻と蘇軾の詩の痛快を學べば良く、それ以外の詩を學ぶ必要はない。ましてや本朝の諸老であればなおさらである。文章はその表現は韓愈から、その意は柳宗元から學べばよい。宋元以後の文章は取るに足りない。秦漢以前のものはその型式を取ればよい。しかし、詩において杜甫と蘇軾を圧倒し、文において韓愈と柳宗元をくじいたとしても、一介の詩僧にすぎないのである、と文筆に溺れることを戒めている。ただし、ここでは桃源が柳文を高く評価していることが分かる。

蘭坡景菴(一四一九〜一五〇一)は「韋香説」(『雪樵独唱集』)で次のよう

に述べている。

從唐興而詩道再盛、声律大備。然学陶者、不過韋蘇州之與柳愚溪。韋詩如璞玉、柳詩似精金、不假琢磨、以成妍。其餘不能至于彼至处、似村寺高僧之有野躰。故不自陶韋柳之門庭而来者、未嘗為詩人焉。

唐の興りしより詩道再び盛んにして、声律大いに備はる。然れども陶を学ぶ者は、韋蘇州の柳愚溪とに過ぎず。韋詩は璞玉の如く、柳詩は精金の似く、琢磨に假らず、以て妍を成す。其餘彼の至る処に至る能はず、村寺の高僧の野躰有るが似し。故より陶韋柳の門庭より来らざる者、未だ嘗て詩人為らず。

ここでは詩について、蘭坡の考えを示している。詩道は唐代に再び盛んになり、山水詩については陶淵明を学ぶ者で韋応物と柳宗元に及ぶ者はいないとしている。柳詩は精製された黄金のように、磨かなくても美しいと評する。また、陶淵明と韋応物と柳宗元を学ばなかつた者で詩人となつた者はいない、とまで述べている。蘭坡が柳宗元の山水詩に対して極めて高い評価をしていたことが窺える。

万里集九（生没年未詳）は「文麗号説」（『梅花無尽蔵』）で、中国の文学について次のように言う。

天下三分之後、劉備曹瞞等、盾鼻磨墨、波瀾万丈。龍翔鳳舞、尚帶鋒鏑之餘臭、吹醇乎之風。西晋頗操王国之遺音、誦三十車之書、而作鷓鴣賦者、是為最也。東晋綏無文章、只陶徵士之歸去来一篇而已。齊梁陳隋、蟬噪之衆作、於道無取之也。李杜鳴盛唐之木鐸、而後柳刺史韓吏部、並厥風雅之響、而金声玉振、伝海内之模範。吁、及趙宋、而歐梅蘇黃、翰墨之氣象一新。

天下三分の後、劉備・曹瞞等、盾鼻に墨を磨し、波瀾万丈なり。龍翔鳳舞、尚ほ鋒鏑の餘臭を帯び、醇乎の風を吹く。西晋頗る王国の遺音を操り、三十車の書を読み、而して鷓鴣の賦を作る者、是れ最と為すなり。東晋綏

じて文章無く、只だ陶徵士の歸去来一篇のみ。齊梁陳隋は、蟬噪の衆作、道に於いて之を取る無し。李杜盛唐の木鐸を鳴らし、而る後に柳刺史・韓吏部、厥の風雅の響を並べ、金声玉振、海内の模範を伝ふ。吁、趙宋に及びては、歐梅蘇黃、翰墨の氣象一新せり。

中国文学の各時期における特徴を述べている。盛唐の李白と杜甫が世を導いた後、柳宗元と韓愈とは風雅の世界で一緒にそろって現れ、それを引き継いで模範を示したと評価している。

また万里は、『明叔録』に収められている律詩（詩題不明）の中で「雄文何讓柳州柳、美譽可齊荊国荊。」（雄文何ぞ柳州の柳に譲らん、美譽荊国の荊に齊しくすべし。）と、おそらく依頼した僧の優れた文章が柳宗元に勝るとも劣らないと称している。

景徐周麟（一四四〇～一五一八）は「盈進泉禪師肖像」（『翰林葫蘆集』）で次のように詠んでいる。

大蒙平生稽古、寧願富貴耀前。讀韓柳之文、則琇石室論圓悟佛眼。探史漢之蹟、則洪覺范合班固馬遷。四書六經胸中夜雨、五家七宗掌内人天。

大いに平生の稽古を蒙り、寧ろ富貴の耀前を顧みる。韓柳の文を讀めば、則ち琇石室の圓悟・佛眼を論ずるがごとし。史漢の蹟を探れば、則ち洪覺范の班固・馬遷に合するがごとし。四書六經胸中に夜雨あり、五家七宗掌内に人天あり。

ここでは韓愈と柳宗元の文章を読んで、石室琇が圓悟克勤と仏眼清遠を論ずることができ、『史記』と『漢書』の奥深い道理を探って、覺範恵洪が班固と司馬遷に合することができたという。柳宗元の文章を読むことによって、石室が高義な論を展開することができたとし、その文章を高く評価していることが窺える。

禪僧は柳宗元の文章については、韓愈と同様に学ぶべき必須のものにとらえ、

詩についても陶淵明の流れを詠唱するものとして高く評価している。

二、柳宗元の為人に対して

中期においては柳宗元に対する賛が詠じられたり、柳宗元の伝記や故事に關することが引用されたりしていた。後期において、瑞溪周鳳（一三九一〜

一四七三）は「詭羅池廟碑」（『臥雲藁』）で次のように詠じている。

出守龍城嘗險難、為神何恨不生還。

元和天下小如斗、風馬周遊八極間。

出でて龍城を守り險難を嘗む、神と為りて何ぞ生還せざるを恨まん。元和の天下小にして斗の如し、風馬周遊八極の間。

柳宗元が亡くなった後、その地の民は憐れんで羅池廟を建てた。同時代の韓愈や後世の蘇軾はそのことを悼み碑文を製した。柳宗元が龍城で優れた政治を行うも、多くの困難や險阻に遭遇した。しかし、神となったのだから生還できないからといって何の恨むこともない。元和の天下は僅かばかりのもの、風に乗る馬のように広い天地を歩き回ったのだという。総じて柳宗元の不遇を悼んでいる。

文叔真要是『諸賢雜文』の中で、詩軸を持ってきた某に次のように述べている。

旧冬見示序並詩。渾金璞玉、一覽拭目。憤怒之所逮、発而成活筆。内而甘

露滅・泉罵天、外而杜浣花柳河東。非自獲其罪者、皆因所親之罪連及。（略）

旧冬序並びに詩を示さる。渾金璞玉にして、一覽して目を拭ふ。憤怒の逮ぶ所は、発して活筆を成す。内に甘露滅・泉罵天あり、外に杜浣花・柳河東あり。自ら其の罪を獲る者に非ず、皆な親しむ所の罪の連なり及ぶに因る。

（略）

ここでは文叔が某に詩と序を示され、それに対する感懐を述べている。非常に優れており、一覽しさらに注意を加えて見てみる。文章に憤怒の表れている箇

所があり、その文章については筆の勢いが良い。まるで内に覺範慧洪と大慧宗杲を秘め、外に杜甫と柳宗元が表れたがごとくである。その憤怒は自ら罪を得たのが原因ではなく、親しき人物の罪に連座したためであるという。某を柳宗元が政争に敗れた王叔文一派に連座して左遷されたことに照らし合わせている。

月翁周鏡（？）一五〇〇）は『半陶文集』巻一の巻末で次のように述べている。

是年結制前二日、小友彦龍至、自遊但陰。袖間出一吟卷、以見示焉。（略）

拗韓愈石鼎、而序聯句後者一首、探題而詠、画壁而戲者、各一首、蓋晞内

翰觀瀑、舒王釣魚也。其它載嚴詩於杜集、編劉論於柳文者、亦惟錯矣。已

前共四十八首、成軸甚鉅。

是の年の結制前の二日、小友の彦龍至る。自ら但陰に遊ぶ。袖間より一吟巻を出し、以て示さる。（略）韓愈の石鼎を拗し、聯句の後に序する者一首、題を探りて詠じ、壁に画きて戯むる者、各一首、蓋し内翰の觀瀑、舒王の釣魚を晞らかにす。其の它嚴詩を杜集に載し、劉論を柳文に編する者のごとく、亦た惟れ錯るなり。已前共四十八首、軸を成すこと甚だ鉅なり。

ここでは、月翁が彦龍周興が持ってきた詩軸を見て、そのすばらしさを賛している。拗体・後序・題詠・画贊詩といった種類の作品を製しており、それらは蘇軾が瀑をみて詩の悪いところを洗い流し、舒王が魚釣りをして悟りの境地を体現したことをあきらかにするであろう。巻の中には彦龍自身が作者ではない詩文も収められており、それらも嚴武の詩が杜甫の詩集に所収され世に伝わり、劉禹錫の「天論」（上中下）が柳宗元の詩文集（巻十六）に所収されたように、文集の文彩を施しているという。柳宗元と劉禹錫の交流、柳宗元の作品集の特徴を理解していると言えよう。

禅僧は、柳宗元が左遷で僻地に流されながらも、赴任地で立派な政治を行ったことを高く評価している。

三、柳宗元「江雪」詩に対して

(1)「寒江独釣図」に対する賛詩

中期になると、各寺院に塔頭や寮舎の創建が増加するに従い、中国から書院や書斎を中心とする建築様式が移入された。それらの装飾に必要な水墨画や障壁画が描かれるようになり、さらに画図の上に禅僧の賛を求めることが始まった。柳宗元の「江雪」詩も水墨画の対象となっており、禅僧が賛詩を付している。「江雪」詩には次のようにある。

千山鳥飛絶、萬徑人蹤滅。

孤舟蓑笠翁、獨釣寒江雪。

千山鳥飛ぶこと絶え、萬徑人蹤滅す。孤舟蓑笠の翁、獨り釣る寒江の雪。全ての山では鳥の飛ぶことも無くなり、全ての小道では、人の歩んだ跡が積雪のため消えてしまった。一艘の小舟には、蓑と編み笠姿の老人が、寒々とした雪の降る川で、一人だけ魚を釣っている。柳宗元は冬の山水に溶け込む漁翁の姿を巧みに描き出している。禅僧は、こうした自然と一体になった境地を好んでいたようである。

瑞溪周鳳は「画軸」(『臥雲藁』)で次のように述べている。

江北江南雪衰風、諸峯玉立照遙空。

蓑翁独釣未歸去、身在柳州詩句中。

江北江南雪ふりて衰風ふく、諸峯玉立し遙空を照らす。蓑翁独り釣りて未だ歸去せず、身は柳州の詩句中に在り。

結句に翁の身が柳宗元が詠じた詩句にあることから、この画軸は柳宗元の「江雪」詩を対象にしたものであろう。江に雪が風を巻いて降りしきり、多くの峯がそびえ立ち、はるかな空に映えている。その中に蓑を着た翁が一人釣りをしているに帰ろうとしない、とある。

希世靈彦(一四〇三〜一四八八)は「題画」(『村庵藁』)で次のように詠ん

でいる。

前山向晚雪漫漫、吹度蘆洲酒釣灘。

滿笠滿蓑渾白尽、漁翁独是不言寒。

前山晚に向かひて雪は漫漫たり、蘆洲に吹き度りて釣灘に洒ぐ。笠に満ち蓑に満ち渾べて白尽す、漁翁独り是れ寒きを言はず。

画賛詩である。暮れにさしかかった山に雪が果てしなく降り、あしの生えている洲にも吹き渡り浅瀬に降り注いでいる。笠や蓑に雪が積もり一面真っ白であるが、漁翁は寒いことを口に出さない、とある。「雪」「蓑」「漁翁」「独」とあるのを見れば、この画も柳宗元の「江雪」詩を対象にした物であろう。

万里は「雪時着蓑衣釣。則必為画本。柳柳州資始、鄭都官、有続焉」(雪時に蓑衣を着て釣る。則ち必ず画の本為らん。柳柳州資始し、鄭都官、続くる有り)『梅花無尽蔵』で次のように詠んでいる。

暮淮塔影礼僧伽、不奈寒威如是俄。

峰遠天涯雪初置、漁翁船底定修簑。

暮淮の塔影礼の僧伽、寒威の是の如く俄なるを奈ともせず。峰は遠く天涯雪初めて置く、漁翁船底に定めて簑を修めん。

詩題では、雪の降る中に簑を着け釣りをしている画図について、柳宗元の「江雪」詩より描かれたことを述べている。その画に対して、暮れの淮水では塔の影が映り、礼拝する僧がいるものの、厳しい寒さが俄に起こるのをどうしようも出来ない。峰は遠く天の果てにあるも雪が積もり始めており、漁夫は船の底で簑の準備を行っていることであろう、と詠んでいる。

万里は「画軸二首其二」(『梅花無尽蔵』)で次のように詠じている。

釣魚船上謝、余習未忘機。

遂託寒江鷺、昔蓑今羽衣。

魚を釣るを船上に謝するも、余習未だ機を忘れず。遂に託す寒江の鷺、昔

は簑今は羽衣。

其一の題注に「一布穀、一鷺」とあることから画図には鷺も描かれていたことが分かる。漁翁は魚を釣ることを船上にてやめているが、前々からの習慣のため未だに欲念を忘れることができないでいる。そこで、遂に魚を釣ることを寒い河の鷺に託すことにした。魚を釣るのは、昔は「江雪」詩に出てくる簑を着た漁夫であったが、今や羽の衣を付けた鷺に変わってしまった、と言う。

万里は「画軸」(『梅花无尽藏』)で次のように詠んでいる。

皆雪江山塔隔河、主人对卷意如何。

欄前幸有晚船繫、合只学漁披一簑。

皆雪の江山塔は河を隔つ、主人巻に対して意は如何。欄前幸ひに晩船の繫ぐ有り、合に只だ漁を学びて一簑を披るべし。

江山が雪にすっぽりと覆われ、塔が河を隔てて立っている。主人はこの画軸を見ていかに思うのか。欄干の前に幸いに夕暮れの船が繫がれ、ちょうど漁を学んで簑を身につけたところである、と画図の情景と主人の意を詠んでいる。この詩の後に次のような跋を述べている。

右、柳柳州江雪詩云、千山鳥飛稀、萬径人蹤滅。孤舟簑笠翁、獨釣寒江雪。

又鄭都官雪詩云、乱飄僧舍茶煙湿、密洒歌樓酒力微。江上晚來堪畫處、漁人披得一簑婦。洪駒父詩話云、東坡言、鄭谷雪詩、持村学中語。子厚此詩

信有格也哉。殆天所賦不可及也。…(略)…吁至東坡面前、雖云李杜不免

瑕類。矧其余者邪。今对雪之図、兼用樹柳鄭二人之提撕云。

右、柳柳州の江雪詩に云ふ、千山鳥飛ぶこと稀に、萬径人蹤滅す。孤舟簑笠の翁、獨り釣る寒江の雪、と。又鄭都官の雪詩に云ふ、乱飄の僧舎茶煙湿ひ、密かに歌樓に洒げば酒力微なり。江上晚來晝くに堪ふる處、漁人一簑を披得て帰る、と。洪駒父詩話に云ふ、東坡言ふ、鄭谷の雪詩は、村学中の語を持つ。子厚の此の詩は信に格有るかな。殆んど天の賦す所にして及

ぶべからざるなり、と。…(略)…吁東坡の面前に至りては、李杜と云ふと雖も瑕類を免れず。矧んや其の余の者をや。今雪の図に對して、兼ねて柳鄭の二人の提撕を用ひ樹つと云ふ。

「画軸」詩については柳宗元の「江雪」詩と鄭谷の「雪」詩を意識していることを述べ、両詩に蘇東坡が評をつけていることを述べている。蘇軾は「江雪」詩について、真に趣があり、天から授けられたようだと評している。「江雪」詩を称揚するために蘇軾の言を引用している。また、蘇東坡にかかればどのような人でも欠点を言われてしまうと、蘇東坡の鑑識眼を高く評価している。そして、名高い柳宗元「江雪」詩と鄭谷「雪」詩の教えから自身の詩を詠じたという。

景徐周麟は「題揚知客畫一首其二」(『翰林葫蘆集』)で次のように詠んでいる。

雪如搏飯是船窓、浦口風噴緊擊樁。

翻轉柳州有聲畫、蓑翁未肯釣寒江。

雪は飯を搏つが如し是れ船窓、浦口風は噴りて緊しく樁を撃つ。柳州に翻轉し聲畫有り、蓑翁未だ寒江に釣るを肯せず。

船の窓辺では雪がまるで飯粒を打ち付けるようであり、川のほとりでは風が厳しく杭に吹き付けている。その翻轉する様は柳州にも及び、柳宗元が声(言語)と画(書)を残した。簑をつけた翁は寒い河で釣りを承知していかのごとく無心である。揚知客の画図は柳宗元の「江雪」詩を対象にしているのは明らかである。

景徐周麟は「遠浦歸帆、江天暮雪」(『翰林葫蘆集』)で次のように詠んでいる。

萬頃烟波帆影雙、無人葉雪釣寒江。

山風吹傘不堪力、上有僧房欲借窓。

萬頃烟波帆影雙び、人無く雪葉りて寒江に釣る。山風傘を吹き力に堪へず、上に僧房有り窓を借らんと欲す。

水面は極めて広く、もやがわき起こり、帆の影が並んでいる。人影は見えないものの、雪が散る中、寒江に釣している。山からの風が傘を吹き、その力に堪えることができず、山上にある僧房で宿を借ろうとする、とある。画図には「瀟湘八景」が描かれていたようであるが、賛詩では「江雪」詩を結び付けて詠じている。

以上のように、「寒江獨釣図」に対する賛詩は数多く製されている。それによって多くの禅僧の意識下に「江雪」詩が存するようになったことが窺える。

(2) 禅僧の「江雪」詩理解

禅僧は「江雪」詩及び画図に対してどのような理解を持っていたのであろうか。横川景三（一四二九〜一四九三）は「雪江説」（『小補東遊後集』）で次のように述べている。

江之瑞阜、有一少年。諱曰釣、今曹源柏舟長老寧馨也。為人敏而好学、実奇童也。由是柏舟不以常児待之、庭誨諄諄、玉成可知也。一日其遊、携此軸来、索為釣立字、且作之説。余曰、古今以釣為業者不一矣。（略）余特愛柳柳州獨釣寒江雪之句、遂命釣曰雪江。然而余所謂釣、非世之所謂也。

江の瑞阜、一少年有り。諱を釣と曰ひ、今曹源柏舟長老の寧馨なり。人と為りは敏にして学を好み、実に奇童なり。是に由りて柏舟は常児を以て之を待さず、庭誨すること諄諄、玉の成ること知るべきなり。一日其れ遊び、此の軸を携へて来り、釣の立字を為し、且つ之の説を作さんことを索む。余曰く、古今釣を以て業と為す者一ならず。（略）余特に柳柳州の「独り釣る寒江の雪」の句を愛すれば、遂に釣に命じて雪江と曰ふ。然而れども余の謂ふ所の釣は、世の謂ふ所に非ざるなり。

ここで横川は、柏舟宗趙の優れた弟子、釣が字を求めてきたことに対し、「雪江」という字を付与している。横川は柳宗元の「江雪」詩の句「独り釣る寒江の雪」

を特に愛しており、そのためその詩句から「雪江」を取っている。ただし、その内容は世間が意味するところではないとし、後文では仏典等から禅的内容を付加して解説している。

横川景三はさらに「釣雪齋説」（『補庵京華統集』）で次のように述べている。蓋し有釣於書者、有釣於詩者、有釣於棊於酒者、是也。誠齋楊万里、有釣雪舟齋、希慕柳柳州江雪之詩、而其義者釣於意者也。穎叔秀知客、就予求齋名。名以釣雪、又取于柳詩、本于楊義也。（略）

蓋し書に釣むる者有り、詩に釣むる者有り、棊に酒に釣むる者有るは、是なり。誠齋楊万里に、釣雪舟齋有り、柳柳州の江雪の詩を希慕し、其の義は意に釣むる者なり。穎叔秀知客、予に就きて齋名を求む。名づけて釣雪を以てするは、又柳詩より取り、楊の義に本づくなり。（略）

ここでは横川が齋に「釣雪齋」と名付けた理由を述べている。楊誠齋が「釣雪舟齋」と名付けたのは、柳宗元の「江雪」詩を慕い、その詩意に求めるところで名付けたという。そして穎叔秀知客が横川に齋名を求めてきたのに対し、横川は、柳宗元の「江雪」詩より「釣雪」と名付け、その意味は楊誠齋が齋名を付けたところに基づくこと述べている。

希世靈彦は「伝心印住善住江湖疏」（『村庵藁』）で次のように述べている。

睽惟祖翁之精藍、如見故国之喬木。一字華星両章秋月、庶嗣徽音。孤舟篋笠獨釣寒江、敢忘旧約。

睽るに祖翁の精藍を惟ひ、故国の喬木を見るが如し。一字華星両章秋月、庶はくは徽音を嗣がん。孤舟篋笠獨釣寒江、敢へて旧約を忘る。

心印□伝が善住寺に住するにあたっての江湖疏である。祖師の残した寺院をかえりみると、故郷の高い木を見るがごとく越えがたい。しかし、杜甫の「同元使君春陵行」詩にあるがごとく、一字が星のように輝き、二人の文章が月のように他を照らし、素晴らしい評判を受け継いでほしい。また柳宗元の「江雪」

詩にあるがごとく、参禪に務め以前の約束を敢えて忘れるよう努めてほしい、と住寺を勧めている。「江雪」詩と無心を結びつけているようである。

万里は「釣雪斎詩並序」(『梅花無尽蔵』)で次のように序を述べている。

龍集戊申菊節之前數日、接浙避兵馬於武陵、欲赴越上之佳境。連雨滿天、未得發軔、留滯逆旅、借筆硯書焉。意甚不快、漫作釣雪之詩上軸。可謂寒江釣雪之図也。

龍集戊申菊節の前數日、接浙して兵馬を武陵に避け、越上の佳境に赴かんと欲す。連雨天に滿ち、未だ軔を發するを得ず、逆旅に留滯し、筆硯を借りて書す。意は甚だ不快なれども、漫りに釣雪の詩を作りて軸に上す。寒江釣雪の図と謂ふべきなり。

長享二年九月九日の數日前に兵亂を避けて越に行こうとしたが、雨のため出發できず宿に泊まっていた。気分は優れないが釣雪斎贊詩を軸に記したとある。まさしく寒江釣雪の図と言うに相應しいとする。

正宗龍統(一四二九—一四九八)は「四時画山水贊」の「冬」(『禿尾長柄帚』)で次のように述べている。

蓋斯図者、取柳河東江雪詩而描也歟。詩曰、千山鳥飛絶、萬徑人蹤滅。孤舟蓑笠翁、獨釣寒江雪。今也山之白者、僅七八峯而無鳥。鳥飛絶云者、無若有。林舎髣見、溪上橋僅示有徑而無人。人蹤滅云者、亦無若有。矧山與徑俱錯迕、盡萬千、雖十幅鶯溪、而不可得矣。斯画之所莫及也。江上有孤舟、閣檣戴笠、篷外独坐而釣者、摸倣末句爾。至於詩之以雪為尾而顯之首、則東坡有曰、信有格也哉。微釣者、孰其在鳥尽人稀之処、能注目乎。於是懷曠神潔、世慮何有。榮辱咸忘、可謂卓立于天地之表。斯復画之所莫及而詩之至妙也。不翅画也。後之能詩者、亦所莫及矣。恐世之見予語者、乃謂、唯愛詩、不愛画。予非不愛画、偶因図拳柳之独歩乎千載者、悉俾人知殆天所賦不及焉耳矣。

蓋し斯の図は、柳河東の江雪詩を取りて描くならんか。詩に曰く、千山鳥飛ぶこと絶え、萬徑人蹤滅す。孤舟蓑笠の翁、獨り釣る寒江の雪、と。今や山の白きは、僅か七八峯にして鳥無し。鳥飛ぶこと絶ゆと云ふは、有るが若き無し。林舎は見るに髣も、溪上の橋に僅かに徑有るを示すも人無し。人蹤滅すと云ふは、亦た有るが若き無し。矧んや山と徑と俱に錯迕して萬千を尽くし、十幅の鶯溪と雖も、得るべからざるをや。斯の画の及ぶこと莫き所なり。江上に孤舟有り、檣を閣め笠を戴き、篷外に独り坐して釣る者、末句を摸倣するのみ。詩の雪を以て尾と為すも之を首と顯すに至りては、則ち東坡の、信に格有るなりと曰ふ有り。微かに釣る者、孰か其れ鳥尽き人稀なる処に在りて、能く注目せんや。是に於て懷曠神潔、世に慮ること何ぞ有らん。榮辱咸な忘れ、天地の表に卓立すと謂ふべし。斯れ復た画の及ぶこと莫き所にして詩の至妙なり。翅に画かざるなり。後の詩を能くする者、亦た及ぶこと莫き所なり。恐らくは世の予が語を見る者、乃ち謂ふ、唯だ詩を愛し、画を愛さず、と。予は画を愛さざるに非ず、偶、図に因りて柳の千載に独歩する者なるを挙げ、悉く人をして殆ど天の賦す所にして及ばざるを知らしむのみ。

「寒江獨釣図」の贊である。正宗は「江雪」詩が余りにも優れているため画に描ききれないことを述べている。山の白い様子はわずか七八峯にとどまり鳥がない。「鳥飛絶」はこの図に描かれているように描かれていない。林の家は見えるようであるが、谷の上の橋にはわずかに小道があり人はいない。「人蹤滅」も描かれているように描かれていない。ましてや山と小道が入り交じって萬千に及び、さらに十幅の鶯溪を描いたとしてもこの境地を得ることはできないのである。この画図の及ばないところである。江に一つの舟があり、笠を着て苦の外で一人座って釣りをしているのは、「獨り釣る寒江の雪」を模したものである。詩の中で雪を末句で述べてその首を表しているのは、蘇軾が言うよ

うに真に格を備えていると言える。釣る者は、一人人がいない場所にあつて誰が注目しようか。この境地にいたり、思ひは明らかに精神はさつぱりし、世を超越することができるのである。栄辱を忘れ、天地の表に一体になつて立つと言ふことができよう。これもまたこの画図の及ばないところであり、詩の優れたところである。ただ描くことができなただけなのである。後世に詩を詠むのに精通した者も及ばないところなのである。恐らく自分の評を見た人は、私がただ詩を愛しているだけで、画を愛していないためだと言うだろう。私は画を愛していないことはなく、たまたま画図によつて柳宗元の詩が千年に一人であることを取り上げ、人に天が賦与したもので及ばないことを知らしめるものであることを述べただけなのである。

以上のように、後期禅僧は「寒江獨釣図」より、雑念・煩惱を捨て去り、翁と天地とが一体となつた情景を読みとり、賛詩・称揚文を製している。画図によつて視覚的效果も得られることから、需要も多く、禅的境地を示す格好のものとして扱われたと言えよう。

四、柳宗元と愚溪に対して

柳宗元は永州の地に流された折、自身が愚かであつたためこの地に流されたとして、八つの景勝地に「愚」字を加えて呼称している。特に中期の禅僧によつて、八愚の一つである「愚溪」は柳宗元が自ら修養に務め、自然と融合した佳処として高く評価されている。後期ではどのように詠出されているであろうか。

天隱龍澤（一四二二〜一五〇〇）は「愚溪」（『黙雲稿』）で次のように述べている。

百不会兮百不知、潺湲日夜涉狐疑。

離氷無水君看取、劈箭機前莫鈍遲。

百すべて会さず百すべて知らず、潺湲せんくゑんとして日夜狐疑に渉る。氷より離れては水無

し君看取せよ、劈ひつせん箭機前鈍遅すること莫かれ。

号頌である。愚溪の様子を詠じ、悟りの契機を述べている。何事も会せず知らず、溪の流れのように絶え間なく疑い続けている。氷より離れては水が無いことを君は看取しなさい、その煩惱を断ち切る瞬間は弓が放たれる瞬間のごとくであり躊躇してはいけなさい、と開悟の瞬間を表現している。

天隱龍澤は「月建住東福」（『黙雲集』）で次のように述べている。

猶在後昆可慕、寔是古人所難。自愛某溪、柳儀曹撰八愚序。久寓佳境、蘇

太史作三笑図。

猶ほ後昆の慕ふべき在るがごとく、寔まことに是れ古人の難しとする所なり。自ら某溪を愛す、柳儀曹八愚の序を撰す。久しく佳境に寓す、蘇太史三笑図を作す。

虎関師鍊―龍泉令淬―愚溪知至―邵外令英―月建令諸となる。月建が東福寺に住するにあつたつての疏である。子孫が慕うべき事であるが、古人が困難としてきたことでもあると励ました後、柳宗元が自ら溪谷を愛し、八つの景勝地を「愚溪詩序」（巻二十四）の中で「八愚」と称し、蘇軾が久しく景色のよい場所（廬山）に寓し、「三笑図賛」を製したことを言う。月建に東福寺の境致を愛してほしいことを願っている。

愚溪については、禅の宗旨に通じる高遠な場所としてとらえられているようである。

五、禅的場面において

後期に至るまで禅的場面において柳宗元に関する事項がしばしば引用されていた。宗旨を述べる場面は主に「字説」「語録」「疏」といった諸作品である。

横川景三は「花嶽春菴主賛」（『小補東遊後集』）で次のように述べている。

道人活計、菴主老拳。惟憲惟馨、種樹如説郭橐駝之伝。有名有実、逐花似

參岑大虫之禪。(略)

道人の活計、菴主の老拳。惟れ惑、惟れ馨、樹を種ゑて郭橐駝の伝を読むが如し。名有り実有り、花を逐ひて岑大虫の禪に參ずるに似る。(略)

花嶽春菴主である傑岩禪偉(大義之子)に対する賛である。ここでは菴主が得道して弟子の教育を生業とし、その徳と名声が響き渡り、まるで柳宗元の「種樹郭橐駝伝」に、植木職人が木の性質を見抜いてそれに応じて育てることが書いてあるように、その指導が弟子の本来の性質を伸ばすようであるという。また名実が伴い、花を逐っていくように參禪するのはまるで大虫宗岑の禪のようであるという。

横川景三は「培睡齋説」(『補庵京華集』)で次のように述べている。

(略) 一日公告予曰、我平生無四立壁、拳為己有、每逢睡足處。指曰、吾愛吾廬。陸渭南詩、曰一杯濁酒栽培睡。培睡兩字、爬著癢處、請以培睡為齋名。如何。予曰、善。仍作培睡齋説、以胎之。(略) 柳柳州作種樹郭橐駝伝、其末曰、吾問養樹、得養人術。予今讀種樹伝、得培睡術。夫三条椽下、七尺単前、公栽培睡之地也。(略)

(略) 一日公予に告げて曰く、我平生に四立の壁無く、拳げて己が有と為し、毎に睡足の処に遭ふ。指して曰ふ、吾吾が廬を愛す。陸渭南の詩に、一杯の濁酒睡を栽培すと曰ふ。培睡の兩字、癢處に爬著すれば、培睡を以て齋名と為さんことを請ふ。如何、と。予曰く、善し、と。仍りて培睡齋の説を作し、以て之に胎る。(略) 柳柳州種樹郭橐駝伝を作し、其の末に曰く、吾樹を養ふを問ひ、人を養ふの術を得、と。予今種樹伝を読むに、睡を培ふの術を得。夫れ三条の椽下、七尺の単前は、公の睡を栽培するの地なり。(略) ここでは、「公」こと廷材慈樟が、平生において全て自身の思いのままに暮らし、いつも睡眠の充足している場所に過ごしていることをいい、陸游の「暮秋」詩にある「培睡」の二字がかゆいところに手が届くように、自分の意に通じて

すつきりさせることから、その齋を「培睡齋」にしたいと願ひ出ている。横川はその申し出に納得し、「培睡齋」の説を製している。その説の中で柳宗元の「種樹郭橐駝伝」の終わりに、樹木を養うことを知ることから、人間を養うことを知ることができたところを読み、自身もこの「種樹郭橐駝伝」を読んで睡眠を培う術を得たという。直接に齋の名に通じていないにせよ、横川の思考に強い影響を与えていることが分かる。

彦龍周興は「蓮甫字説」(『半陶文集』)で次のように述べている。

(略) 或有正旦開花者、或有臘月開花者。千年之碧、十丈之紅、曰奇曰瑞。書於柳柳州之表、記於周濂溪之説。雜出於花史花譜、樹經葉録、百家之編、而昭昭矣。(略)

(略) 或いは正旦に開花する者有り、或いは臘月に開花する者有り。千年の碧、十丈の紅、奇と曰ひ瑞と曰ふ。柳柳州の表に書し、周濂溪の説に記す。花史花譜、樹經葉録、百家の編に雜出し、昭昭たり。(略) ここでは蓮の花について、正月に咲くものもあれば十二月に咲くもの、長い年月葉をつけ、長い茎に花を咲かせ、その美しさから古くから愛されていることを述べている。柳宗元は「為王京兆賀嘉蓮表」(卷三十七)を、周濂溪は「愛蓮説」(『古文真宝』所収)を記して蓮を稱揚しており、多くの書物で言及されていることを言う。

景徐周麟は「叢茂彦任真如」(『翰林葫蘆集』)で次のように述べている。

樹有萬年、至今殘花春雨。竹無三月、依舊晚節歲寒。匪與紅紫爭時、固知盛衰有數。某、如鄒氏律、似柳州文。

樹に萬年有り、今に至りて殘花春雨たり。竹に三月無く、舊に依りて晚節歲寒たり。紅紫と時を争ふに匪ず、固に知る盛衰の數有るを。某、鄒氏の律の如く、柳州の文の似し。

茂彦善叢が真如寺に住するにあたっての江湖疏である。樹に萬年の寿命がある

も、今春の雨が降る中、散り残った花が付いている。竹に春三月は関係なく、むかしのままに歳寒の晩節を迎える。紅色の花と紫色の花とが時を争うようなことはなく、それらを見ると全く栄枯盛衰にさだめがあるのを知る、と茂彦善叢が真如寺に住することを運命として祝している。そして、茂彦が、斉の鄒衍が律を吹くと暖気を招来したように、柳宗元が柳州で清廉な政治を行い優れた文章を残したように、叢林を感化するであろう、と称揚している。

景徐周麟は「山城州仁和寺安養谷薦覆寺化縁疏并序（同門疏）」で、次のように述べている。

冠其冠衣其衣、岑公錢叫元寶童子。斧彼斧鋸彼鋸、柳州文稱陽潛梓人。萬縁所成、百堵皆作。

其の冠を冠とし其の衣を衣とし、岑公の錢元寶を童子と叫ぶ。彼の斧を斧とし彼の鋸を鋸とし、柳州の文陽潛を梓人と稱す。萬縁の成す所、百堵皆作す。

ここでは柳宗元の「梓人伝」を引用している。「梓人伝」は、楊潜という大工の棟梁が適材適所を指示することが述べられている。ここではそうした指導力を発揮することを望んでいる。

柳宗元の詩文が直接に宗旨と関係しているわけではないが、宗旨に導く際にして啓発する材料になっていると言えよう。

六、種種の場面において

禅僧は特定の場面に関連して柳宗元に關する事項を詩文に詠み込み、自己の博識を披露することがしばしばある。瑞溪周鳳は「叔衡璣西堂住豊後萬壽諸山江湖疏」（『臥雲疏』）で次のように述べている。

蜀日越雪、猶懷子厚退之。牡丹海棠、孰為歐陽司馬。才德之尊久継者、声名之下今其庶乎。

蜀の日越の雪、猶ほ子厚・退之を懷ふがごとし。牡丹海棠、孰か歐陽司馬と為さん。才徳の尊久しく継ぐ者、声名の下今其庶はん。

ここでは韓愈も柳宗元も「答韋中立論師道書」という題で文章を残しており、その中で蜀では日が照らないため、日が照ると犬がほえ、越では雪が降ると犬がほえることを述べている。見識の狭い者が卓絶な言行に対して疑い怪しむことを述べたものである。また一方で、歐陽修や司馬光のように牡丹と海棠を称揚することはできないことを言い、疏を述べるに当たって謙遜の意を表している。

瑞溪は「七夕次雲字韻」（『臥雲藁』）で、「星夕吾無乞巧文、拙詩天外恨離群。」（星夕吾に乞巧の文無く、拙詩天外離群を恨む。）と、七夕に文が巧みになることをお願いすることもなく、自分が拙い詩ばかりを製するのを恥じ入ることを詠んでいる。これは柳宗元の「乞巧文」（巻十八）を意識したものであろう。

横川景三は「読柳柳州霹靂琴贊」（『小補集』）で次のように詠んでいる。

八司馬党数先生、文以琴中霹靂鳴。
写罷貞元供奉曲、瀟湘流水断腸声。

八司馬の党先生を数へ、文は琴中の霹靂を以て鳴らしむ。貞元の供奉の曲を写し罷へ、瀟湘の流水断腸の声。

柳宗元の「霹靂琴引贊」（巻十九）を読んだ感想を詠じている。柳宗元が八司馬の一人に数えられ、その文章は琴の中で霹靂の名前を世に知らしめている、と柳宗元の「霹靂琴贊」が名文であることを指摘する。そして、貞元において天子のお供をする曲を写し終え、僻地に流されることになり、瀟水と湘水に悲しみの声を響かせた、と柳宗元の不遇を詠んでいる。

天隱龍澤は「遊箕山記」（『天隱和尚文集』）で次のように述べている。

座上有短屏、画以蘭亭勝集。謝安孫統等四十二人、列于水辺、沈吟者爛醉者、各臻其極。綃破墨龜、有不可弃者。蓋唐絵也。宅主不解文字、不知

為其蘭亭図、以故不珎之。柳子厚云、蘭亭不遭右軍、則清湍修竹、蕪沒於空山矣。嗚呼。

座上に短屏有り、画に蘭亭勝集を以てす。謝安・孫統等四十二人、水辺に列し、沈吟する者爛醉する者、各、其の極みに臻る。綯は破れ墨は糞り、弁ずべからざる者有り。蓋し唐絵なり。宅主文字を解せず、其の蘭亭の図為るを知らざれば、以ての故に之を珎せず。柳子厚云ふ、蘭亭は右軍に遭はざれば、則ち清湍修竹、空山に蕪没す、と。嗚呼。

座上に王羲之が蘭亭で謝安や孫統を別荘に招いて、曲水の宴を開いた様子が事に細かに描かれている屏風があるが、絹が破れ墨がくもっているため主人はそれが蘭亭図だとは分かっていない。その有様を見て、柳宗元が「邕州柳中丞作馬退山茅亭記」(卷二十七)で、蘭亭が王羲之に逢わなかつたら、清らかな早瀬や修竹は、誰もいない山に生い茂り荒れ果てていただろう、と述べたことに等しいと嘆いている。

天隱龍澤は「瑞柳」(『黙雲藁』)で次のように述べている。

一枝吹緑映金門、知是唐家雨露恩。

一樹春風有榮辱、柳江柳属柳宗元。

一枝枝緑を吹き金門に映ず、知る是れ唐家の雨露の恩たるを。一樹春風榮辱有り、柳江柳は属す柳宗元。

枝枝に葉を茂らせ、緑が美麗な門に映えているのは、唐の国家の恩沢によるものであることを知る。同じ樹でありながら春風が吹いているのを見ると、世に榮辱があることがわかり、柳江のほとりの柳も柳宗元が植えたものであり、きつと美しいことだろうと、樹も為政者や所有者によって影響を受けることを詠じている。これは柳宗元が「種柳戲題」(卷四十二)で「柳州刺史、種柳柳江辺。」

(柳州の柳刺史、柳を種う柳江の辺。)と詠んでいるのを引用している。

万里集九は「誦送窮文」(『梅花無尽蔵』)で次のように詠んでいる。

曉嗽薔薇露一瓶、鶯声度処意先醒。

斯文别有風流号、春湧元祐北斗經。

曉に嗽ぐ薔薇露の一瓶、鶯声度る処意先う醒む。斯文別に風流の号有り、春は湧く元祐北斗の經。

「送窮文」は韓愈の作品である。万里はこの詩の題注に「柳子厚得昌黎文、先以此薔薇露洗手、然後誦。」(柳子厚は昌黎の文を得るや、先づ此の薔薇露を以て手を洗ひ、然る後に誦む。)と付けている。このことを踏まえた上で、朝に薔薇露で口をすすいでから読んでいると、鶯の声が聞こえてきて、自分の思いが目覚めるようであったことを詠んでいる。後半句は韓愈が風流とされていたこと、僧に北斗經を持つようにさせた朝廷を非難したことについて詠じている。万里集九は陸游像の画図に賛詩を付すに際して、次のような序文を兼ねた長文の題を詠んでいる。

石林詩話云、蔡天啓言、嘗與張文潜論韓柳五字警句。文潜拳退之、暖風抽

宿麦、清雨卷帰旗、子厚、壁空残月曙、門掩候虫秋、皆集中第一也。余謂、

細雨騎驢入劍門、蓋劍南集中之警策邪。謹題放翁像上云。

石林詩話に云ふ、蔡天啓言ふ、嘗て張文潜と韓柳の五字の警句を論ず。文潜は退之の、暖風宿麦を抽き、清雨帰旗を巻くと、子厚の、壁は空し残月の曙、門は掩ふ候虫の秋を挙げ、皆な集中の第一なり、と。余は謂へらく、細雨騎驢劍門に入るは、蓋し劍南集中の警策たるか、と。謹みて放翁の像上に題して云ふ。

まず『石林詩話』の中で、張文潜が柳宗元の「酬婁秀才寓居開元寺早秋月夜病中見寄」詩(卷四十二)に「月が残る夜明けに壁が虚しく立ち、季節の虫が鳴く秋を門が被っている」とある句を集中の第一として引用する。そして、万里自身は陸游の「劍門道中遇微雨」詩の「細い雨が降る中に驢馬に乗って劍門に入る」が警句であるとし、陸游の画像上に詩を賛したという。

万里集九は次のような長文の詩題を言う。

余六年前、挿尺余之桜苗於庭背。今始着花。歎而拊焉。命老妻醜妾取濁、就樹下祝花之寿。作小詩擬嘉樹伝云。

余は六年前、尺余の桜苗を庭背に挿す。今始めて花を着く。歎びて拊つ。老妻・醜妾に命じて濁を取らしめ、樹下に就きて花の寿を祝ふ。小詩を作すに嘉樹伝に擬すと云ふ。

六年前に桜の苗を植えたものが、今やつと花を付けたのを喜び、そこで柳宗元の「種樹郭橐駝伝」に擬して詩を詠むという。詩には次のようにある。

従挿桜苗纒尺余、六年今日着花初。

根深枝茂希無恙、学郭橐駝聊護慮。

桜苗の纒か尺余を挿してより、六年今日花を着く初なり。根は深く枝は茂り恙無きを希ひ、郭橐駝を学び聊か慮を護らん。

詩題の内容を前半句で詠じ、後半では根が深く伸び、枝がよく茂り、何事もなく成長することを願ひ、自身も郭橐駝を見習ひ、家を守っていききたい、と詠ず。柳宗元の「種樹郭橐駝伝」は、植木屋・郭橐駝の伝記を述べたものであり、有樹のあり方を述べている(前述)。桜の樹の成長を喜び、そこから「種樹郭橐駝伝」を想起している。

万里は、「義牛防狼弁」(『梅花無尽蔵』)で、飼い主が狼に襲われているのを見た牛が、その狼を追い払ったのを称え、次のように述べている。

府内内司之族藤丹足下、召彼父質此一件、借手於画師、写二子及義牛、就余雷贊語。余謂、牛之為物、頭角崢嶸、黄鍾滿脰。代農夫之勞、則耕畝。畝之春、伴諸生之行、則汗竹帛之夏。加之扶軍旅之雄、則背量餉、尾内丁。寧戚之経、子厚之賦、縷縷拏其勲。可謂義獸也。

府内内司の族藤丹足下、彼の父を召して此の一件を質し、手を画師に借り、二子及び義牛を写し、余に就きて贊語を需む。余謂へらく、牛の物為る、頭

角崢嶸として、黄鍾脰に滿つ。農夫の勞に代はりて、則ち畝の春を耕し、諸生の行に伴ひて、則ち竹帛の夏に汗す。之に加へて軍旅の雄を扶けて、則ち量餉を背にし、丙丁を尾にす。寧戚の経、子厚の賦、縷縷として其の勲を拏ぐ。義獸と謂ふべきなり。

主人を救った牛を画図に描いた上で、万里に贊詩を求めている。そこで万里は牛が農耕を助けてくれる上、戦では兵糧を運び、しっぽに火をつけて敵軍に突入するなど、大いに役立つことを指摘する。そして、それらの利点を知ってか、寧戚の事を記した『呂氏春秋』や柳宗元が記した「牛賦」には牛の優れた点が述べられていることを言う。万里は牛から柳宗元の作品を想起しており、柳文に精通していることが窺える。

景徐周麟は「東坡笠履圖」(『翰林葫蘆集』)で次のように詠んでいる。三句目が(蠻村餘得屐痕地)の場合もある。

昨日九重今四州、海南戴笠乃天游。

屐痕寸土蠻村雨、平陸風波子厚舟。

昨日九重今四州、海南笠を戴く乃ち天游。屐痕寸土蠻村の雨、平陸風波子厚舟あり。

景徐は蘇軾が笠を被っている画図に対して贊詩を付している。蘇軾が海南島へ左遷された地で笠をかぶっていることを天が与えてくれた遊事ととらえ、そのような僻地でも柳宗元の作品集を所有していることを詠出している。これは『老学庵筆記』(陸游撰)巻九に、「東坡在嶺海間、最喜誦陶淵明柳子厚二集、謂之南遷二友。」(東坡 嶺海の間に在りて、最も喜びて陶淵明・柳子厚の二集を讀み、之を南遷の二友と謂ふ。)とあり、蘇軾が海南島に流された時、柳宗元と陶淵明の作品集を持っていった逸話を拠り所としている。

景徐周麟は「鶯聲喚雨」(『翰林葫蘆集』)で次のように詠じている。
餘寒轟轟鎖黃鸝、始聽梅邊欲雨時。

明日乱啼花落尽、山城二月柳州詩。

餘寒、鼻鼻ひびにして黄鸝とよを鎖し、始めて聴く梅辺雨ふらんと欲するの時。明日乱れ啼き花落ち尽す、山城二月柳州の詩。

立春後に残る寒さが鶯のさえずりを制止していたが、今日、ちょうど雨が降り出しそうになった時、初めて梅の辺りでさえずりを聞くことができた。明日、一斉にさえずりを始めると、花は雨により悉く落ちるであろう。このような二月における山際の城郭の様子を柳宗元も詠じているという。後半句は柳宗元の「柳州二月榕葉落盡偶題」詩に「宦情羈思共悽悽、春半如秋意轉迷。山城過雨百花盡、榕葉滿庭鶯亂啼。」(宦情 羈思 共に悽悽、春半ばにして秋の如く意は轉た迷ふ。山城 過雨 百花盡き、榕葉 庭に満ち鶯は乱れ啼く。)とあるのを意識している。時の情景から柳詩を想起していることが分かる。

禅僧が柳宗元の詩文を愛玩し、種種の場面で柳詩・柳文を想起し、応用して詠じている。詠じられる場における人々もそのことを認識していたはずであり、柳宗元の作品が当時において浸透していたことが察せられる。

七、禅僧の柳宗元の詩文習得について

(1) 伝や贊に見られる柳文習得

後期の禅僧は柳宗元の文章をどれほど習得していたのであろうか。横川景三は「前任相国桃源和尚大禅師真贊」(『補庵京華外集上』)で次のように述べている。

祖師有記其伝無窮。掀翻漢書唐書及十七史波瀾、鏡裏教莖雪白。嘲弄韓文
柳文並三千首風月、灯影一点花紅。日々開談義林、負笈歸之如市、時々臨
騷雅席、簪筆從者爭功。

祖師に其の伝の窮まり無きを記す有り。漢書唐書及び十七史の波瀾を掀翻し、鏡裏教莖 雪白し。韓文柳文並び三千首の風月を嘲弄し、灯影 一点花紅し。

日々談義の林を開けば、負笈の之に歸すること市の如く、時々騷雅の席に臨めば、簪筆の從者功を争ふ。

桃源瑞仙に対する贊である。桃源は、『漢書』『唐書』を始め、十七史等の史書の波瀾を翻し、柳宗元と韓愈の文章を始め多くの詩を嘲るほどであった。そのため桃源のいる場所では毎日典籍・仏典の講談を開くと、多くの遊学の士が集まり、また時々詩会の席に臨むと、簪を挿した從者たちがその功を争ったとある。桃源の博識ぶりを強調している。

横川景三は「春陽和尚尽七日香語」(『補庵京華外集』)で次のように述べている。

(略) 祖承常德師承永徳、叙宗族於佐々木繼繩繩。内学春溪外学瑞溪、育人才於菁菁我偲偲切切。藏仙会下掛搭此山、養源室中鍛鍊有日。五千滿架之書、特嗜坡谷詩集口吟手披。四六開堂之疏、旁論韓柳文章眼高心活。(略)
(略) 祖は常德に承け師は永徳に承け、宗族を佐々木に叙すこと繼繩繩たり。内に春溪を学び外に瑞溪を学び、人才を菁菁がが育むこと偲偲切切たり。藏仙の会下にして此の山に掛搭し、養源の室中にて鍛鍊して日有り。五千滿架の書、特に坡谷の詩集を嗜みて口吟手披す。四六開堂の疏、旁に韓柳の文章を論じて眼高心活す。(略)

春陽景杲の初七日の香語である。空谷明応の法系で模堂承範を師に持つ春陽は、佐々木氏の子孫であることを述べ、内典を春溪洪曹に、外典を瑞溪周鳳に学び、人の才能を盛んに育んだ。藏仙の会下として相国寺に掛塔し、養源室において日々鍛鍊し、五千架もの多くの書を読み、特に蘇軾と黄庭堅の詩集を嗜んで口ずさんではその書を開き、何度も読んだ。また韓愈と柳宗元の文章を論じ、批評鋭く心を活き活きさせた、と春陽の習学姿勢を述べている。柳宗元の文章を読むことよって、有益な効果もたらされたことを指摘している。

蘭坡景菴は「物部豊州刺史覚阿禅定門把火」(『雪樵独唱集』)で次のように

述べている。

家々観世音、愛惠遠修孟軻德行、念々弥陀仏、嫌法照託子厚文章。

家々観世音、惠遠を愛して孟軻の徳行を修め、念々弥陀仏、法照を嫌ひて

子厚の文章を託す。

物部氏某が代々観世音を信仰し、生前惠遠を愛し、孟子の徳行を修めたこと、また阿弥陀仏を唱え、中唐に活躍した法照を嫌い、柳宗元の文章をたよりにしたことを述べている。

(2) 講義活動に見られる柳文習得

禅僧は歴然と柳宗元の詩文を習得しようとし、習得し得た者は称揚されている。その背景には禅僧の講義活動がある。景徐周麟は瑞溪周鳳の伝記「興宗明教禪師行状」(『翰林胡蘆集』)で次のように述べている。

又為後進、講黃詩杜詩韓柳之文。五十歳以来、講圓覺維摩金剛般若若心經楞嚴楞伽孟蘭盆法華梵網起信論等。

又た後進が為に、黄詩・杜詩・韓柳の文を講ず。五十歳以来、圓覺・維摩・金剛般若・般若心経・楞嚴・楞伽・孟蘭盆・法華・梵網・起信論等を講ず。瑞溪が黄庭堅の詩・杜甫の詩・韓愈の文・柳宗元の文を講義していたことが分かる。

講義活動の痕跡として、抄物や五山版『新刊五百家注唐柳先生集』(以下『五百家本』と略称)の書き入れが存する。⁵⁾ 東北大学に所蔵される『五百家本』書き入れには、希世靈彦や湖月信鏡等の講抄が見られ、特に湖月の抄が多く引用されている。湖月は宮内庁に所蔵される『論語抄』に「青松和尚二湖月ノ柳文ヲ発起アツメ時キ、此句ノ事ヲセラレタツ。」とあるように、柳文に深く関わったようである。

宮内庁に所蔵される『五百家本』の書き入れには、天隱龍澤の抄が引用され

ている。天隱は瑞溪周鳳が諸書から抜粋した『刻楮集』を、さらに編集して『刻楮』を撰している。天隱の『刻楮』には瑞溪の『刻楮集』の目録が収められており、そこには柳文の抄が二種ほど存していたことが書かれている。⁶⁾ 天隱はそれらの抄を見て柳文に詳しくなっていたことが察せられる。また天隱編纂と目される抄物が建仁寺両足院に所蔵されている。⁷⁾

国会図書館に所蔵される『五百家本』にも多くの書き入れが残されている。その巻頭に「横川景三書入」とあり、横川が書き入れたものがある。ただし、横川本人が書き入れたものであるかは今後調査する必要がある。

このように、後期禅僧が柳文を習得の対象としていたことが窺える。これらの柳文解釈の痕跡については、いまだ整理されていないのが現状と言える。

まとめ

後期禅僧の詩文集の中に柳宗元に関する事項がどのように詠出されているか見てきた。おおよそ下記の特徴が見られた。

- ① 柳宗元の為人と文章の優れた点を称揚する。
- ② 柳詩を対象とした画図(『寒江独釣図』)に対する賛詩を詠じる。
- ③ 宗旨を述べる場面で柳文より援用する。
- ④ 種類の場面で柳詩・柳文を援用する。

これらは、後期禅僧が柳文習得に励んだ後、自身の中で昇華して創出されたものである。

大凡の詠出状況は初期と中期を継承するものであるが、後期になって際立った特徴は②である。「寒江獨釣図」に対する賛詩・称揚文は後期になって一段と増えている。雪が降り一人簑を着た漁夫が魚を釣る様子を描いた画図が、誰しもが認知することができる禅の境地に相応しいものとされたのであろう。禅林が退廃していく中、公家や武士の庇護を求めて、彼らに禅の宗旨を分かって

もらうために、視覚的効果を用いることが最も手取り早い方法と考えたのではあるまいか。

後期になると詩文の作品数が極端に増える。膨大な量の中にあつて、柳宗元に関する事項が詠出される作品の数は、杜甫・蘇軾・黃庭堅に較べると遙かに少ない。ただし、柳宗元に対して批判する禅僧は全く見られない。詠出のされ方が時期が降るにつれて固定化される傾向にあり、杜甫や蘇軾に較べるとそのパターンが少ないことに起因していよう。

初期から後期を通じて、柳宗元に関する事項の詠出のされ方については大きな変化が見られるわけではない。柳宗元に対して批判することなく、一定の高い評価を下しているのを見れば、柳宗元の作品集を中世禅林において禅僧が愛玩した外集作品と考えて間違はないと言えよう。

終わりに、柳宗元の受容について考える場合に、柳宗元の作品集だけでなく『古文真宝』も対象にする必要があるという点を補足したい。『古文真宝』には多くの抄物が残されており、その中で柳宗元の文章は高い評価を得ている^⑧。そこで、今後は柳宗元の抄物・『五百家本』書き入れに、『古文真宝』の抄物をも精査し、禅僧の柳文解釈がどれほど深いものであったか確かめることを課題としたい。

【注】

①拙稿「日本中世禅林における柳宗元受容の研究―初期の場合―」（『中国古典文学研究』第5号 二〇〇七）・拙稿「日本中世禅林における柳宗元受容―中期の場合―」（『愛媛大学教育学部紀要』第56巻 二〇〇九）

②前掲①参照

③前掲①参照

④朝倉和氏『『薔薇』発掘―五山文学素材考―』（『国語と国文学』第88巻4号

二〇一一）に中世禅僧の「薔薇」観が詳しい。

⑤拙稿「日本中世禅林における柳宗元受容―その過程と問題点―」（『愛媛大学教育学部紀要』第55巻 二〇〇八）

⑥伊藤東慎氏「瑞溪周鳳の『刻楮集』について」（『禅学研究』第57号 一九六九）

⑦拙稿「建仁寺両足院所蔵『柳文抄』の編纂者について―国立歴史民俗博物館所蔵五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生集』書き入れ者との関係―」（『国語国文』第78巻第1号 二〇〇九）・拙稿「両足院所蔵『柳文抄』について」（『両足院叢書『柳文抄』所収）（臨川書店 二〇一〇）

⑧拙稿「日本中世禅林における柳文解釈―『送薛存義之任序』の場合―」（『愛媛大学教育学部紀要』第57巻 二〇一〇）

